

艱難時代の前半か、それ以前のどこかの時点で、その神殿は建てられます。

3番目なので、ある人たちは第三神殿と言うんですね。果たして第三神殿再建はあり得るのでしょうか。3つの障壁があります。**1) どこに建てるのか。2) どのように建てるのか。3) 誰が建てるのか。**この3つに対して回答があるならば実現します。

1) どこに建てるのか

これが一番大きな問題だと思います。神殿というのはどこに建ててもいいんじゃないんです。第一神殿と第二神殿は同じ場所に建っていました。第一・第二神殿が建っていた場所に建てなければなりません。しかし、現在その場所はイスラムの聖地となっているんですね。そのエリアを神殿の丘と言いますが、そこに岩のドームという建造物が建っています。これはイスラム第3の聖地とされています。

私たちは一観光客として神殿の丘に入場することはできます。できますが、入る前に厳重な持ち物検査があって、基本的には手ぶらでないとダメですね。聖書を持って行くこともダメです。聖書の中に“神殿の丘の上にユダヤ人の神殿が建っていた”という記事が書いてある。それを神殿の丘で読ませたくないんですね。読ませてはならない。ムスリムの人たちは断固として拒否するんです。“この場所にかつてユダヤ人の神殿があった”ということを読み上げることを断固拒否する。それくらいナーバスなんです。トラブル回避のために、イスラエル側も、持ち込みやここに神殿があったことを示すようなイラスト・図は絶対アウト。

そんなにも神殿やイスラエル側の動きにナーバスになっているなら、ましてや、ここにユダヤ教神殿を建てるのがどうして可能でしょうか。普通に考えたらまず不可能です。

しかし、1つの可能性はエゼキエル戦争ですね。イスラエル領内に侵入した軍隊の上に、神の裁きが下って壊滅することが**エゼキエル書 38章**後半に書いてあります。このエゼキエル戦争の時に、神殿の丘にあるイスラム施設が全壊する可能性が高いと私は見えています。そこが更地になってしまえば、大きな障壁が取り除かれることになると思います。

2) どのように建てるのか

第二神殿はBC516年に建てられますが、その後ヘロデ大王が増築に次ぐ増築。より豪華なものに仕上げるために工事を続け、完成するのに86年掛かりました。すごい長期工事ですよ。もしヘロデ時代の神殿をそのまま再現するのなら、またしても100年近く掛かるんだろうか。そんなことはないと思いますね。現代建築技術を使うことによって、あっという間に組み立てられてしまうでしょう。

都心に巨大なビルや建物を建てる時、現場でトンテンカンテン工事すると、騒音公害・粉塵公害・交通渋滞、色んなものを招くので、そんな時代遅れの工法は今しないんですね。ちょうどレゴのブロックのように、他の場所でビルのパーツのようなものを造って、それを現場に持って行って合体させ、あっという間に完成させるという方法なんです。それによって、粉塵も交通渋滞も騒音公害も抑えることができる。

おそらくこの神殿を建てる時も同じようにすると思います。というのは、聖書にこう書いてあるんです。

列王記第一 6章7節。第一神殿（ソロモンの神殿）が建てられた時の記述です。

神殿が建てられたとき、石切り場で完全に仕上げられた石で建てられたので、工事中、槌や斧や、いかなる鉄の道具の音も、いっさい神殿の中では聞こえなかった。

これって、現代建築技術の工法と同じじゃありませんか。ですから、この神殿を建てる人たちは、現代建築最先端の技術を使うことに何もためらう必要がない。それは聖書が指示していることだということで、これが建ち出したらあっという間に建つと思います。

3) 誰が建てるのか

2000 年も前に滅びた あの神殿を再現しようなんてことを考えているユダヤ人が、今どきいますか？ いるんです。神殿再建財団という団体がそうです。

私はここのトップに 2 回インタビューしました。トップの方のお名前はゲルシヨム・ソロモン。ソロモンは第一神殿を建てた王の名前ですね。彼の女性秘書の名前がなんとバテ・シェバ。なんでそんな名前?! 日本人は聖書のあの記述、ダビデの不倫相手のことを思い浮かべるので、バテ・シェバという名前に不倫のイメージが付いているかもしれませんが、バテは娘。シェバは 7 (*完全数)。完全なる娘の意味です。それはともかく。ここにラビ・ハイム・リッチマンというラビがいて、彼にもインタビューし、彼らの話を総合して色々組み合わせさせていきました。

今 彼らは何をしているのか？ 神殿はまだ建ってない。しかし、神殿が建った時すぐに、旧約聖書時代のいけにえを献げる儀式を再開できる準備をしていると言うんです。旧約聖書の記述によると、神殿の中で使う器具・道具・大祭司の衣装・設備など、全部合わせると 99 種類の備品が必要だそうです。この 99 の様々な道具や備品を今次々作っていて、私が行った時 8 つ出来ていると言っていました。

例えば、神殿の聖所の中にメノラーという燭台があります。これは 24 金/42 kg で作られているのですが、既に現物があるんですよ。溶接じゃないんです。全部金で、打ち付けながら作っていく。これが既に完成して、エルサレムのジュイッシュ・クォーター(ユダヤ人街)に安置されてるんですね。

彼らとのインタビューで 1 つ興味深いと思ったのは、ユダヤ教のラビが神殿建設に協力的なこと。イスラエルのユダヤ教のトップのことをチーフ・ラビと言います。ラビのトップが 2 人いる。なぜトップなのに 2 人？ アシュケナジー系のチーフ・ラビと、セファラディー系のチーフ・ラビは違うんです。そして仲が悪い。アシュケナジーとセファラディーで、ユダヤ教の伝承や習慣・やり方が違って、どちらも自分たちのほうに、より誇りを感じているのです。

この 2 人が、神殿の中でどう振る舞ったらいいのか、どんな器具の形がいいのか、ということについては協力的だと言うんですね。私が直接聞いたのは、「死体に触れて儀式的に汚れたユダヤ人たちを清めるために赤い牝牛を屠り、その灰を使う」と旧約聖書に書いてありますが、「赤い牝牛」というのは現在の牛の品種では何に当たるのか？ アシュケナジーとセファラディーのチーフ・ラビが話し合っ、て、「これ」と一致しているそうです。

他のことでは色々細々なところで衝突するのに、神殿はユダヤ人のバラバラの心を 1 つにまとめることができるということで、強かに推し進め、彼らの活動を実現させるために、莫大な献金が世界中のユダヤ人から集まっているんですね。彼らは本気なんです。

また別のグループは、神殿が建って器具が運び込まれた時、祭司としてすぐにいけにえを献げることができるように、今から予行演習をしているのです。彼らにもインタビューしました。

ということで、まだ神殿は建っていないけれど、見えないところで神殿再建の動きは既に始まっている。動き出したら一挙に進展し、建ち上がることになると思います。私たちはそのような時代の中に、今生かされているということですね。

これで、艱難時代の前に起こる 14 の前兆の全てを解説しました。

次のシリーズに行く前に、皆様から質問を賜りたいと考えております。

というのは、私の一方的な解説で、ずいぶん分かりにくいところもあったのではないかと危惧しています。専門用語を使わないようにできるだけ努力したんですけど、やっぱりつい出てしまったと思うんですよね。非常に難しい点もあったのではないかと思いますので、もし質問があればお寄せ下さい。建設的な質問は全ての方々に有益なものになると考えていますので、それを募りたいと思います。全部の質問にお答えするのは出来ないかもしれませんが、できるだけ努力したいと思います。

次のテーマ「聖書預言がいかに実現して来たのか」という観点で、これからも別のシリーズで取り組んでいきますのでお楽しみ下さい。

チャンネル登録と いいねボタン、よろしくお願いします。

ではまた このチャンネルでお目にかかりましょう。さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。